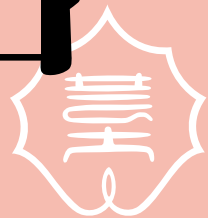


藝大通信

GEIDAI TSUSHIN



28

MARCH 2014
TOKYO GEIDAI
東京藝大広報誌

乾
久美子

受賞教員インタビュー

【第七回】卒業生に聞く。

坂崎千春

【第十一回】受賞学生インタビュー

池尻貴尚 松木さや 久保雄太郎

【第二十回】教員は語る

鈴木太朗 × 櫻田 亮

【第九回】上野の寄り道散歩道「近代文学散歩」

【第七回】研究室探訪

大学院映像研究科 映画専攻

東京藝術大学広報誌 藝大通信 No.28 MARCH 2014

編集発行 東京藝術大学 藝大通信編集部

乾久美子

受賞教員インタビュー 第9回

被災地で取り組んだ「陸前高田のみんなの家」の共同設計の過程を展示した「ここに、建築は、可能か」でヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展「金獅子賞」を受賞。



Photo by Hiroaki Horiguchi

プロセスが意味をもつ建築

日本では、以前より、地すべりや豪雨といった自然災害の頻度が増しており、多くの方が避難所や仮設住宅で過酷な生活を強いられることが当たり前になってきました。こう

いった問題にどのように対処していくべきかという意識の高まりが、建築家のあいだに芽生えていたところ。に東日本大震災がおきてしまった。そこで、伊東豊雄さん、隈研吾さん、妹島和世さん、内藤廣さん、山本理顕さんが、建築家に何ができるかと

いうことを模索していく目的で「帰心の会」をつくり、その第一歩として「みんなの家」というプロジェクトが立ち上げられたのです。例えば、仮設住宅団地には簡易的な公民館が用意されることもあります。大抵はプレファブの殺風景なもので、心に傷を負った方々が日常を取り戻す契機になる活動が生まれるような建物になっていない。個々の仮設住宅が簡易的なのは仕方がないとしても、せめて日常生活の近くに毎日通いたくなるような場所をつくれなにか、ということがプロジェクトの根底にあります。そうした思いから、仙台市宮城野区をはじめとする数カ所で、「みんなの家」の計画が行われていました。

そうした中で、伊東豊雄さんが

第28号 目次

02 受賞教員インタビュー 第9回

乾久美子

04 seidai gallery vol.8

島田文雄 青白磁栄螺文平皿

06 教員は語る 第20回

鈴木太郎×櫻田亮

09 受賞学生インタビュー 第11回

池尻貴尚 松木さや 久保雄太郎

12 TOPICS

音旬 映旬 美旬

20 卒業生に聞く。第7回

坂崎千春

22 研究室探訪 第7回

大学院映像研究科映画専攻

24 上野の寄り道 散歩道 第9回

近代文学散歩

26 上野の杜の波瀾万丈 第17回

サルナートの壁画

吉田千鶴子

28 展覧会&演奏会情報

法隆寺―折りとかたち―

藝大プロジェクト2014

「シェイクスピアと人とその時代」シリーズ

30 NEWS 2013.08〜2014.01

編集後記

ヴェネチア・ビエンナーレの「コミッション」のプロポーザルを提案することになり、新しい「みんなの家」をつくり、そのドキュメントを持って行くことを構想されたのです。また、それまで計画が進んでいた「みんなの家」とは違った仕組みとして、私も含めた若い世代の建築家のコラボレーションとすることを考えられました。藤本壮介さんと平田晃久さんと私がプランを練り、そして写真家の畠山直哉さんが記録するというものです。

被災者の切実な声を聴く

このプロジェクトで伊東さんが重視視されたのは、プロセスそのもので

す。建築家だけでなく、使う方々と一緒に建てることを考えることができないかということを考えていました。さらに、個性を競い合うような建築家のあり方を考え直すために、異なる思想をもつ建築家がひとつの建築に取り組むことを考えられたのです。

今回のような大災害を経験した方々とういうふうにつきあっていたら、最初のうちは手探りでしただけで、最初のうちは手探りでしただけで、「陸前高田のみんなの家」ではまず、家を受け取ってくれる利用者探しから始めたのです。しかし、被災者の方々に「みんなの家を」と言ってもなかなか理解が得られない。何件



陸前高田「みんなの家」外観 撮影：乾久美子建築設計事務所

かの仮設住宅団地を巡る中で、実際に利用者がなってきた方が現われ、明るい声で「そういうものをつくってくれるならば、ぜひ皆で使いたい」と言われたのが大きな励みになりました。

設計の過程で、思想と目標を異にする三人の考え



陸前高田「みんなの家」1F内観 撮影：乾久美子建築設計事務所

が、ひとつのアイデアに収斂していかないという時期がありました。そこで、もう一度、現地の人に会って、改めて必要としているものを聴くことになったのです。果たして、困っているのはどんなことか、実際にどういうふうに使っているかを聞くことができたのですが、その後の三人の協働作業はスムーズでした。被災した方々が訴える具体的で切実なニーズが三人の個性を超えて納得できるものであり、三人の思想や目標を越えて実現しなくてはならないものだと感じたからだと思います。その後の建設も大変でしたが「陸前高田のみんなの家」はなんとか竣工しました。

竣工後なのですが、こうした建物は持続的な運営を考えることが大切です。今でも連絡を取り合っている。いろいろな相談にのるようにしています。

藝大通信
No.28
TOKYO GEIDAI
東京藝術大学広報誌
藝大通信 第28号

編集発行

東京藝術大学 藝大通信編集部

編集委員

松下 計（美術学部デザイン科准教授・編集長）
八谷和彦（美術学部先端芸術表現科准教授）
吉田浩之（音楽学部声楽科教授）
鈴木純明（音楽学部作曲科准教授）
磯見俊裕（大学院映像研究科映画専攻教授）
大石 泰（演奏芸術センター准教授）
アートディレクター

松下 計

■表紙デザイン

松本 計

■表紙撮影

堀口 宏明

■撮影

堀口 宏明

■制作

永井文仁・塚田史子（美術学部附属写真センター）

株式会社 平凡社

■発行日

平成二十六年三月十日

お問い合わせ先

東京藝術大学 総務課

〒100-8704 東京都台東区上野公園12-18

電話 050-5555-1102

FAX 03-5685-1760

E-mail tolawase@ml.geidai.ac.jp

URL http://www.geidai.ac.jp/

乾久美子（いぬいくみこ）

准教授・美術学部建築科

一九六九年生まれ。一九九二年東京藝術大学美術学部建築科卒業。一九九六年エール大学大学院修士課程修了。青木淳建築計画事務所の勤務を経て二〇〇〇年に乾久美子建築設計事務所を設立。「アパートメント」で二〇〇八年新建築賞、「スモルハウスH」で二〇一〇年東京建築士会住宅建築賞、「フラワーショップH」で二〇一〇年日本建築士会連合会賞優秀賞や二〇一〇年グッドデザイン賞、二〇一二年度JIA新人賞などを受賞。二〇一二年十月より現職。二〇一三年九月「陸前高田のみんなの家」（岩手県陸前高田市）の設計過程を展示した「ここに、建築は、可能か」で伊東豊雄、藤本壮介、平田晃久、畠山直哉とともにヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展「金獅子賞」を受賞。





工芸科陶芸専攻―教授 島田文雄『青白磁栄螺文平皿』二〇一三年



教員は語る

第20回

美術学部デザイン科 准教授

鈴木 太朗



「WATER LOGO 09」アトリエオモヤ+日本デザインセンター
原デザイン研究所 制作年 2009年

藝大の教育、日本の教育

鈴木 僕は藝大で、学部四年と修士三年、その後博士まで、都合九年間通いました。ここ三年間は、非常勤講師で来ていました。

藝大のデザイン科がおもしろいのは、さまざまな個性の研究室があり、デザインという言葉に囚われず学べることだと思います。僕の学生時代にも、周りにはグラフィックをやる人もいればプロダクトをやる人もいる、表現系の人もいれば、絵画を描いている人もいたり、いろいろな友達に囲まれていました。当時の講評会は、先生方全員が見て回るという形だったのですが、そのような中で根源的な表現としての見せ方を学ぶことができたことがとても良かったと思います。藝大のデザイン科に求められているものには、デザインのジャンルを開拓していくこと、こういうものもデザインだと道を広げていくこともひとつあるのではないのでしょうか。

僕自身、もともと工作が好きで、そういうことを表現手法に取り入れることができないかとずっと考えてきました。その流れもあって、テクノロジーを取り入れつつも自然の物理現象、風や水、空気がいう現象を利用した作品をつくってきたのです。たとえば空気の圧力で風船がしぼんでいくといった物理現象自体がおもしろいと思って、そのおもしろさを最大限に表現できるようにインタラクティブな作品を創ったり、素材表現を美しく見せるということをテクノロジーで制御したりするようなことをずっと続けています。だから僕の作品は構造やシステムは複雑なことをやっていますが、表現はとてもシンプルで、テクノロジーの知識がない方でも楽しんでいただけるものです。某おもちゃメーカーとのコラボレートでインテリアとして商品に

なったり、フランスのシャルル・ド・ゴール空港に、気泡で模様を描いていく大きな装置をプロダクトとして納入したりというような動きもしている。つまりは、企業や公共機関と組んで、公共の空間にふさわしいものを提案し制作していくという意味では、僕は常にデザインというプロセスを踏んでいると考えているのです。

櫻田 僕は、学部四年と修士三年間を藝大で学びました。在籍中は主にイタリア歌曲やイタリア・オペラを勉強していましたので、現在のようにならいます。一般的に「古楽」というと、古典派より古い音楽がこのように呼ばれますが、十四、十五世紀の音楽を「中世音楽」、ルネサンス期の音楽を「ルネサンス音楽」、バロック時代の音楽を「バロック音楽」と言うように、古楽のなかでも時代ごとに少しずつ区切られています。僕がヨーロッパで留学時代から主に演奏活動が続けてきたのは、その中でもバロック時代の音楽です。大学院在学中に、鈴木雅明先生のバッハ・コレギウム・ジャパンに誘われ、アンサンブル・メンバーとして参加していましたので、古楽との最初の触れ合いはそこでした。その後、イタリアのボローニャ音楽院に留学中、古楽を中心に演奏するオーケストラから声をかけていただいて、本格的にソリストとしての活動を始めました。

芸術教育、音楽教育という側面で少しお話をさせていただきますと、日本の音楽教育のシステムは非常に優れていると思っています。私が暮らしていたイタリアでは、一部の小中学校を除いて、音楽の授業がありません。ほとんどの公立学校では、音符の読み方、楽譜の読み方を教えてくれないのです。国立音楽院に進める年齢になるまで、音楽を学ぶ場は私立の音楽教室や個人レッスンが中心になります。これは親に

櫻田 亮

音楽学部 声楽科 准教授

藝大への期待・抱負・提言



北とびあ国際音楽祭 2013《フィガロの結婚》公演より
写真提供：(公財)北区文化振興財団 ©K.Miura

とって大きな経済的負担を強いるので、ある程度裕福な家庭でなければ、子供にしっかりと音楽教育を受けさせるのはなかなか難しい。イタリア人にとって、音楽は貴族社会のたしなみであったという側面が大きく、そういった歴史的な認識の中で、音楽は学校で学ぶものではないという意識が、恐らくどこかにあるのではないかと感じます。それに対して日本は、義務教育から基礎的な音楽の教育がある。情操教育の面においても非常に重要なことだと思います。

美術を観ることで得られる想像力

鈴木 私は実家がとても日本風で、お琴が三台あるという家庭だったんです。姉が二人、妹が一人いて、母親も含めて女性みんなお琴が弾ける。僕も「やりたい」と言ったのですが、「男はやるものじゃない」と諦めざるをえなかった(笑)。姉や妹はその後、音楽への興味を持続して、学生オケでトロンボーンやホルンを演奏したりしていましたので、音楽ができる人のことをいつもうらやましく思います。

この前、僕が卒業した小学校で創立一〇〇周年イベントがあり、そこに招かれてインスタレーションをしたんです。その際、学生と映像や装置を使って光の演出をしたのですが、効果音も入れたということになった。そこで音環(音楽環境創造科)の学生が校歌をアレンジしたり、演出に合わせていろいろな工夫をしてくださいました。すると一気に表現が膨らんできました。そんなこともあって僕は、音環や音楽学部、先端(先端芸術表現科や大学院映像研究科)といった、専門性を持った人たちとすぐにでもつながることのできる空間にいつもいる、ということが藝大の強みなのだと考えます。

櫻田 そうですね。音楽環境創造科は、美術学部

との窓口として、非常に有効だと僕も思います。音は視覚的に表すことが難しいものです。僕もレッスンで、感情を色や形に例えたり、詩の内容や情景を絵や映像で想像させたりすることが良くあります。美術学部生と交流したり作品に触れることは、音楽学部生の感性を磨くことに役立つと思うので、そういう環境がさらに充実すると良いですね。

我々声楽家が担っているのは「再現芸術」ですから、ゼロから何かをつくり出すのは作曲家や詩人や台本作家なんですね。我々は、その残された作品を再現するための技術を勉強している。その技術を用いて、まずは作曲家や台本作家のアイデアを十全に再現する。そしてそれに演奏家の個性や、音楽表現を加えていきます。この二つがいつもせめぎ合っていて、バランスを取るのがなかなか難しいのです。さらに古楽の場合は別の側面として、当時の製法に忠実に楽器を再現し、その音を利用して演奏しよう、それがオーセンティシティ(真正性)の追求につながるのではないかとという大きな流れがあります。ですからたとえば学生たちには、当時の絵画を観てほしいのです。つまり、十七世紀なり十八世紀なりの絵画を観ると、生活の一瞬が切り取られている。町並みでも、人々の服装でも、静物画であればそこに並んでいる果物、楽器はもちろんです。すると絵を観ることで想像力が膨らんで、その時代を想像するきっかけや手段になりますから。

交流することによる刺激と自覚

鈴木 僕の中では、何か自分から発せられるものというのは、結局自分自身の経験なのかなと思っています。今は経験値を増やせと学生に言っています。たとえば遊びに行くことも、旅行に

行くことも、人と交流することも、そういう経験値というのが結局オリジナリティにつながるっていくのではないか。たとえばインターネットで情報を得ようとして、「似たようなものがすでにやられてしまっている」という感覚に常に入ると、制作に対するモチベーションがなかなか上がらないし、そこから始まると、あとは差異を探すだけになってしまふ。でも、美術をやる、デザインをやるということにおいてもっと重要なことは、自分から発せられるものを自分なりにかたちにまとめていく力だと思ふのです。

情報が入ることで洗練される部分はあってもいい。けれども、自分からクリエートしていくことは、本来もっと大切なことのはずです。ともかく遊べというのは、最終的に人脈のつながりにも発展していく。デザインの場合特に、外部との交流はとても重要になっていきます。

僕が学部卒制作でつくったのは、気泡で模様を描くような作品でした。いろいろな機械装置を自分で開発して、デザイン賞をいただいた。その作品を出展したときに、たまたま東京大学工学部で流体力学が専門の、大学院情報学環の教授が観にきていて、興味を持ってくださったんです。

そこで、立ち上がったばかりの東大情報学環の第一期生と、コラボレートして作品をつくるという展開になり、藝大に籍を置きながら二年間東大に通い、研究を続けたという経緯があり



ます。さらには、結果として自分の想像をはるかに超えた作品ができ、大きな評価を得たという経験をしまして、コラボレートによる刺激という貴重な経験をしました。藝大とは異なる価値観が自分の中に入ってくることで、「こういう視点もあるんだ」ということを感じることができた。一方で、だから藝大のこういうところが良かったんだというのが見えてきました。

櫻田 音楽科は他大学との交流の機会というのはなかなか得られないので、自分の立ち位置というか、藝大の良さみたいなものを実感するのは、卒業した後になるかもしれませんね。在学中は、音楽は特にそうだと思いますが、ひとりひとりの学生の「楽器」を育てるということが主眼になってくる。我々音楽家は自分自身の体が楽器なものですから、ある程度年齢がいつて、筋肉や骨格が成人の体に近いところまで成長しないと、正しい身体制御というのはなかなか身につかない。やはり本格的な音楽の技術を学べるようになるのは、変声期が終わった後じゃないと難しいです。大学に入ったぐらいからが、肉体的にも精神的にも大人になって、楽器を自覚的に成長させていくことができるようになる、大切な時期にあたると思います。そしてまた、音大に入るということは、プロフェッショナルな演奏家として活動していきたいという希望があると思っています。ですから、そういう将来を見据えて、それに取り組むことができるような基礎技術をまずは身につけてほしい。自分という楽器を好きになり、もっと開発していきたい、自分にはこういうことができるんだという方向に仕向けていきたいですね。

失敗を恐れずに挑戦してほしい

鈴木 最近、論理立てて答えを出すという学

生が多くなっていると感じます。だから、とてもきれいな作品ができてくるんですけども、もっと体を使って挑戦してほしいと感じることがあります。学校の課題をそつなくこなしましたということをいつまでもやっていても、時代を変えるようなものは出てこないと思う。やっぱり八十点で満足するのではなく、一二〇点を目指してほしい。平均化して、みんなレベルが高いんですよという形になってしまふと、この大学の良さが無くなってきてしまふ。そういう意味で学生の頭をやわらかく変えていくのが、自分の役割だと思っています。

講評会で大失敗してしまってもいいから、自分が良いなと思ったことを本気でやってほしい。そのほうが本人のためになるし、失敗した経験のほうがよほど勉強になると思う。失敗を恐れずどんどん突き進んでいければ、大学を出てからそれが自分の力になっていく。学生のうちに安定的なものを求めていると、結局今後デザインの世界で大きいことはできません。

櫻田 最近の学生について僕が思うのは、演奏会に足を運ぶことが少なくなったのではないかと、ということですね。確かにインターネットは便利で、いろいろな情報が簡単に手に入りませんが、パソコンの画面で見える美術作品と、実際に見る美術作品がまるで違うように、オーディオ機器を通して聞いた演奏は、生の音にはかなわない部分があるのです。それから学生たちには歌う前、演奏する前に、ホールのリハールはできるだけしつかりやりなさいといいたいです。我々は体自身が楽器なので、発した音がどういうふうに反響して、聴衆の耳にどういうふうに聴こえるかというのは、自分の力だけではどうにもならない。つまり、会場の空間も楽器の一部だからです。どういう空間でその音を発するかで、効果が全く変わってくる。実際

にその空間に行つて、その現場に行つて、音を体験しないとつかめません。その音が空間の中でつくり出すものを、積極的に知ろうという姿勢が欲しい。耳だけではなく、皮膚レベルで音がどんなふうにしみ込んでいくかを、もっと体験してもらいたいです。

さらに言わせてもらつと、演奏会に行つて、椅子から立ち上がれなくなるぐらい感動してほしい。そしてその感動の源がどこから来ているかというのを追求してほしい。若いうちに、打ちのめされるような、とんでもないすばらしい演奏に一日でも早く出会ってもらいたいですね。

鈴木太郎（すずき・たろう）

美術学部デザイン科准教授

一九七三年東京都生まれ

二〇〇〇年東京藝術大学美術学部デザイン科卒業、二〇〇二年同美術研究科修士課程デザイン専攻修了、二〇〇五年同博士後期課程デザイン専攻修了。

二〇〇三年よりアトリエオモヤ代表。東京大学大学院情報学環非常勤講師、特任助教、東京藝術大学美術学部デザイン科非常勤講師、長岡造形大学非常勤講師などを務める。

「青の軌跡」でNHKBSデジタルスタジオムグランプリ、第七回文化庁メディア芸術奨励賞、風のかたち」で東京藝術大学卒業・修了作品展野村賞、「WATER LOGO」で、SDA Award

第四十二回SDAデザイン大賞、経済産業大臣賞（アトリエオモヤ）日本デザインセンター原デザイン研究所を受賞。

二〇一三年より現職。

二〇一三年より現職。

二〇一三年より現職。

二〇一三年より現職。

二〇一三年より現職。

二〇一三年より現職。

二〇一三年より現職。

二〇一三年より現職。

二〇一三年より現職。

二〇一三年より現職。

二〇一三年より現職。

二〇一三年より現職。

二〇一三年より現職。

二〇一三年より現職。

二〇一三年より現職。

二〇一三年より現職。

二〇一三年より現職。

二〇一三年より現職。

二〇一三年より現職。

二〇一三年より現職。

二〇一三年より現職。

二〇一三年より現職。

二〇一三年より現職。

二〇一三年より現職。

二〇一三年より現職。

藝大の在校生・卒業生は、
公募展やコンクールで栄誉ある賞を受賞し、
また各分野の最前線で活躍している。
若き才能がふだんの努力とさらなる意欲を語る。

第17回 JPPA AWARDS 2013 学生部門 ドキュメンタリー・その他部門ゴールド賞受賞

池尻 貴尚

◆大学院美術研究科デザイン専攻 修士課程1年

アニメーションは小さい頃から好きで、小学生のときには教科書の隅にパラパラ漫画を描いて、クラスの友だちに見せたりしていました。テレビアニメも観ていましたが、もっと大きなきっかけは、実家が印刷業を営んでいたことです。工場ですから紙がふだんにあり、いらなくなった紙をもらって遊んでいるなかで、パラパラ漫画に夢中になってしまったのです。

中学生になるとパソコンを使い、デジタルでアニメーションをつくるようになり、インターネットの掲示板で、同世代の投稿者と作品を批評し合ったりするようになりました。その頃の仲間のなかには、藝大の大学院映像研究科アニメーション専攻に進んだ人もいます。高校時代にはホームページをつくり始め、モノクロのアニメーションが地元的一般向けコンペで受賞もしましたし、東京のテレビ局の投稿番組で大賞をいただいたこともありました。

ばくがアニメーションに惹かれたのは、

アニメーションの面白さとは、絵のクオリティや密度に関係なく存在し得るということをつくっていくなかで知ったためでした。絵と絵のあいだをつなぐ「間」のようなものに、作品のおもしろさや作家性が出てくる。キャラクターのデザイン自体はシンプルなものでも、そのキャラクターが動き出した途端に、性格が生まれ物語が始まる。そこに作家の個性が滲み出てくるのです。

藝大に入って、1、2年生のときは、課題に応じてグラフィックや立体をつくっていたのですが、卒業制作に取り組むにあたって、3年からは意識してアニメーションをつくるようになりました。でもそのときにつくったものは、作品というより、デザインのなかにおけるアニメーションといえる、提案にとどまるものばかりでした。ですから今回賞をいただいた『海碧の街』は、大学に入ってから初めての作品といえるものです。タイトルの「海碧」はコバルトブルーのことで、ある放射性物質の名前からヒ

ントを得て名付けました。最初は震災を重要なモチーフにしようと思っていました。けれども最終的にこういったモチーフは背景に退き、人がつくってきたものが壊れたときの怖さみたいなことがテーマになっていきました。

作品のなかに「事故」や「原発」というような言葉は出てこないのですが、そういった暗い過去があったことを匂わせる未来の世界の、あるひとりの少年の心の葛藤を描いたつもりです。

東日本大震災の被災地には何度も足を運び、福島第一原発周辺の立ち入り禁止区域の近くに住んでいる人にも取材しました。でも原発に対して、反対と容認のどちらにもつけないで、ずっともやもやしていたんです。そういったなかで、作品をつくることで自分自身が見えてくるのではないかと思い、また作品を観た人に考えるきっかけを与えたいと考えてできたのが『海碧の街』でした。



『海碧の街』(2013年)より

いけじり・たかひさ

1988年島根県出雲市生まれ。2013年東京藝術大学美術学部デザイン科卒業、同大学院美術研究科デザイン専攻入学。『海碧の街』で第17回 JPPA AWARDS 2013 学生部門 ドキュメンタリー・その他部門ゴールド賞を受賞。ICAF2013 (Inter Collage Animation Festival) に出品し、全国6カ所で上映。

第82回日本音楽コンクールフルート部門1位

松木 さや

◆大学院音楽研究科器楽専攻（フルート）修士課程1年

3歳のときからピアノを習い始めて、音楽にはずっと親しんできました。音楽の部活をしたくて、小学4年生で吹奏楽部に入りました。フルートとの出会いは、母が吹かずに持っていたフルートが家にあり、手にしたのがきっかけです。5年生からは、もっと上手になりたいと、地元の千葉縣市川市のレッスンセンターに通うようになりました。個人レッスンを受けると、どんどん楽しくなってきました。できることもできないことも増えていて、のめりこんでいったのです。中高のあいだもずっと吹奏楽部で、個人レッスンとみんなで楽しく演奏することを両立させていました。

中学に入り、全日本学生音楽コンクールを受けるようになると、そこで厳しい評価を受けて、自己満足で終わってはいけなそう考えるようになったのです。同じ

中学生でも私とはレベルが違うと、音楽の深さを身に染みて感じました。その後、コンクールでようやく賞もいただけるようになり、自分には音楽しかないと、音大への進学を志すことにしたのです。

藝大に進みたいと思ったのは、音楽の道を選ぶなら藝大と考えたからです。実際に藝大に進学して分かったのは、環境がすばらしいことです。周りがみんな高いレベルで、音楽に対して考えていることもひとりひとり違います。そこがとても刺激的でした。会話や一緒に演奏する中で音楽の情熱が伝わり、衝撃的でもあり、勉強になりました。

日本音楽コンクールでは、予選のあいだずっと緊張の連続で、演奏が終わっても先に進める手応えなど、自分ではわかりませんでした。本選で演奏したのは、モーツァルトのフルート協奏曲の第1番ト

長調。5人の演奏者のうち3番目で、休憩後の演奏でした。オーケストラのみなさんと休憩室から一緒に出ていく形になり、温かい雰囲気の中緊張が解け、演奏できたのがとても幸運だったと思います。

藝大では現在、高木綾子先生(器楽科准教授)に教わっています。先生のご指導で最も印象的だったのは、「あなたはどうか演奏したいのか」と聞かれたことです。これまでは自分の技術に限界があり、先生のおっしゃった課題をこなすのに精いっぱいでした。「どうか演奏したいか」という問いかけに、最初は自分の考えを導き出せませんでした。しかしそれ以来、自発的に自分で考えて音楽に取り組むようになりました。それがだんだん自然にできるようになり、そこから自分が大きく変わっていったのではないかと思います。



第82回日本音楽コンクール(2013年)
フルート部門での演奏
写真提供: 毎日新聞社

まつき・さや

1990年生まれ。千葉県出身。9歳よりフルートを始める。東京藝術大学音楽学部管打楽器科を首席で卒業。安宅賞、アカンサス音楽賞、三菱地所賞受賞。第62回全日本学生音楽コンクールフルート部門高校の部東京大会第1位、全国大会第1位。第29回日本管打楽器コンクールフルート部門第1位、文部科学大臣賞、東京都知事賞、東京ニューシティ管弦楽団特別賞受賞。第23回日本木管コンクールフルート部門第1位、コスモス賞(聴衆賞)、兵庫県知事賞、神戸新聞社賞受賞。平成24年度優秀学生顕彰文化・芸術分野大賞。2013年皇居桃華楽堂にて御前演奏。第82回日本音楽コンクールフルート部門第1位。岩谷賞(聴衆賞)、加藤賞、吉田賞、E・ナカミチ賞受賞。これまでに二藤部裕一、佐野悦郎、金昌国、高木綾子の各氏に師事。現在、東京藝術大学大学院音楽研究科修士課程1年に在学中。





『石けり』(2013年)より

くぼ・ゆうたろう

1990年大分県生まれ。2012年東京工芸大学芸術学部アニメーション学科卒業。同年東京藝術大学大学院映像研究科アニメーション専攻入学。2012年に『crazy for it』がオタワ国際アニメーション・フェスティバルにノミネート。また、第16回文化庁メディア芸術祭アニメーション部門・審査委員会推薦作品に選ばれる。2013年に『石けり』がプチョン国際アニメーション・フェスティバルのオンライン部門で優秀賞を受賞。

プチョン国際学生アニメーション・フェスティバル オンライン部門優秀賞

久保雄太郎

◆大学院映像研究科アニメーション専攻 修士課程2年

高校生のときテレビのアニメ特集で「エヴァンゲリオン」を知ったのがアニメーションに興味を抱ききっかけでした。それまで見ていたものとなんか違う気がしてすごく面白かったんです。大学は、東京工芸大学のアニメーション学科に進み、在学中に短篇アニメーションや実験映画に触れて、作品としてのアニメーションに対して関心が深まりました。アニメーションの歴史を学ぶ授業のなかで、カナダの作家ライアン・ラーキンの『Walking』という作品を観て、打ちのめされました。ラーキンは、アカデミー賞にノミネートされながら、その後、路上生活をするなど、とても印象的な作家で、彼の作品に刺激され、自分もこういったものをつくりたいと思うようになったのです。この出会いはとても強烈なもので、短篇をつくっていかうと考えるきっかけになりました。

大学の授業で、世界のアニメーション映画祭について紹介された機会がありました。なかでもアヌシー国際アニメーション・

フェスティバル(フランス)は、1日に何百本も作品が上映されるというので、とにかく観に行きたいと思ったのです。そこでアルバイトでお金を貯め、友人たちとアヌシーまで出かけて行ったのです。実際に目の当たりにすると、短編アニメーションの世界でも、海外にはこんなに華やかな場所があるのかと驚きました。大きなスクリーンに作品が流されるのを観たとき、自分もいつかは国際映画祭で上映され、注目を浴びるような作品をつくりたいと思ったのです。

そのころから大学院に進んで、アニメーションをさらに本格的に勉強したいと思うようになりました。藝大の映像研究科アニメーション専攻では山村浩二先生がいますので、ぜひ教わりたいと目指すことにしたのです。先生の作品は学部時代にほとんど観ていて、なかでも『カフカ 田舎医者』が好きです。

プチョン国際学生アニメーション・フェスティバルで賞をいただいた作品『石けり』は修士1年のときの課題です。この映画祭は

現地に行くことができなかった残念だったのですが、アジア圏では比較的大きな規模のアニメーション映画祭のようです。ひとりの男の子が、自分でルールをつくって石を蹴りながら家に帰る。そのうちルールに縛られ、苦戦していく。そして最後は、石から別の対象に興味が向いてしまうといったストーリーです。ぼく自身の子どものころの経験や感情を反映した作品だといえます。

この作品の制作過程でも、物語の流れや手法について山村先生から指導を受けました。先生からは、技術的なアドバイスなどももちろんいただくのですが、それよりも制作の過程で作品の方向性がブレたときに軌道を修正してくれるのです。まだまだ作品の数をこなしていないので、どうしても悩んでしまうことが多いのですが、先生のちょっとした一言に、発想を転換できたこともあります。またアニメーション専攻には意識の高い仲間が集まり、みんながライバルで、自分にとって非常に刺激のある環境です。



新国立劇場公演チラシ



藝大奏楽堂公演チラシ



『藝大オペラ』第59回 定期公演&新国立劇場オペラパレス特別公演 D・チマローザ作曲《秘密の結婚》

1

右上：10月5日奏楽堂公演「第1幕」
右下：10月6日奏楽堂公演「第1幕」
左上：11月3日新国立劇場公演「第2幕」
左下：11月4日新国立劇場公演「第2幕」

Photo by TAKE-O

TOPICS OF
MUSIC

2013.08-2014.01

音旬

1

『藝大オペラ』 第59回定期公演&新国立劇場 オペラパレス特別公演 D・チマローザ作曲《秘密の結婚》

一九五六年にG・ヴェルディ作曲の『椿姫』で第一回公演をスタートした『藝大オペラ定期公演』は、今期五十九回目を迎えた。今回は、十月五日、六日に開催した通常の定期公演（奏楽堂）に加え、文化庁支援の「平成二十五年度大学を活用した文化芸術推進事業」オペラにおけるアートマネジメント人材育成事業」を受け、新国立劇場の協力の下、十一月三日・四日にオペラパレスにおける特別公演が実現した。さらに、三菱地所（株）との共催による恒例の『藝大アーツイン 東京丸の内2013』で同演目のハイライト公演を行い、『藝大オペラ』が異なる会場で多くのオペラファンを魅了した一年となった。

2

藝大アーツ・スペシャル2013 「障がいとアーツ」

「聞こえる色、見える音」

十一月三十日、十二月一日の二日間、本学奏楽堂にて藝大アーツ・スペシャル2013が開催された。



3

ジュネーヴ音楽大学との交流演奏会

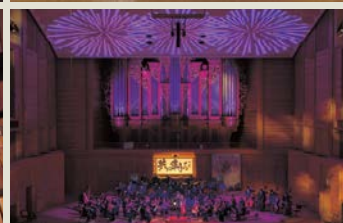
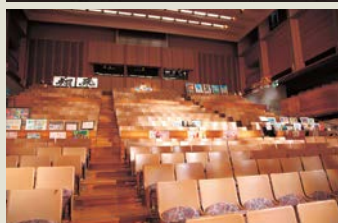
上より

ジュネーヴ音大との合同演奏 奏楽堂にて

4つのヴァイオリンのための協奏曲

両校の学生たち

ジュネーブ公演終了後



藝大アーツ・スペシャル 2013

「障がいとアーツ ～聞こえる色、見える音～」

2

上：聴覚障がい者を中心に多くの人たちが

オーケストラの中に入って音楽を楽しんだ

中右：指揮者の葉 聡さんと子供たち

中左：能の謡

右下：音と色で表現された《美しき青きドナウ》

左下：美術作品を奏楽堂の客席に展示

3

ジュネーヴ音楽大学との交流演奏会

今年は、視覚障がいをもつ世界的なヴァイオリニスト川島成道氏とミャンマーの伝統楽器のプロの演奏家と、国内の視覚・聴覚・知的障がいをもつ幼児から大人までの方々の作品の展示と演奏、ワークショップ（能の心・ダークライト・ペインティング・Tシャツ作り）、関係者によるシンポジウムが行われた。今回は会場として奏楽堂全体を使ったことが大きな特徴で、客席にまで絵画や立体作品が展示され、ホワイエと舞台の両方でアジアと西洋の多様な音楽が演奏された。最後のコンサートでは、この日作ったTシャツを着て満面の笑みを浮かべた子供らによるファッション・ショーが舞台で行われ、聴覚障がいをもつ子供らがオーケストラの楽器の間に座って音楽を楽しみ、ホール全体が一体感に包まれて二日間の演目が閉じられた。

ジュネーヴ音楽大学は一八三五年創立の州立高等音楽教育機関。創立当初にはフランツ・リストも教えていた名門で、現在も数多くの世界的な演奏家が教授陣に名を連ねている。十月三日、選抜された本学の弦楽・管楽の学生十五名と教職員六名がジュネーヴを訪れ、合同オーケストラを組織、オーケストラおよび室内楽を両学の教授陣とともに演奏。藝大教授陣によるマスタークラスも行われた。十月二十一日からは、ジュネーヴ側の学生・教授陣が来日、ミハエラ・マルティン、今井信子教授らによるマスタークラスが行われ、大阪のいずみホール、本学奏楽堂、ヤマハホールで交流演奏を行い、友好を深めるとともに大きな成果を披露した。



いま、映像でしゃべること？ -Orality in the Moving Image-

メディア映像専攻

1

OPEN SYMPOSIUM 2013

アニメーション専攻

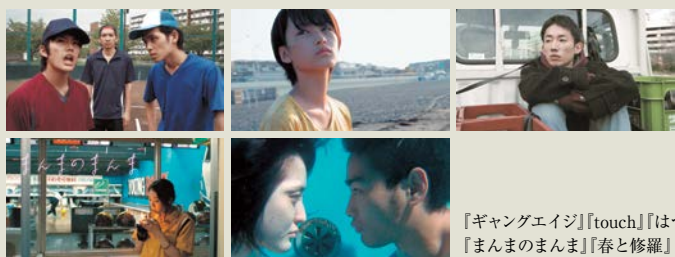
2



オープンシアター 2013 Vol.2

映画専攻

3



『ギャングエイジ』『touch』『はつ恋』
『まんまのまんま』『春と修羅』

TOPICS OF FILM AND NEW MEDIA

2013.08-2014.01

映画旬

1

いま、映像でしゃべること？ -Orality in the Moving Image-

◎メディア映像専攻

大学院映像研究科では、サムスン電子ジャパン株式会社の協力のもとに、携帯電話、スマートフォン、デジカメなどの小型化、多機能、高性能の時代の映像を考えるGALAXY Lab.を二〇一三年四月に立ち上げた。

そのGALAXY Lab.で行ってきた様々な実験とそこから生じた映像文化への問いかけを、十二月七日、八日に渋谷ヒカリエ8/COURTにて、トークイベントやショート・プレゼンテーションと展示上映を通して公開した。

2

OPEN SYMPOSIUM 2013

◎アニメーション専攻

「アニメーション映画祭の現在形」というキーワードを元に国際アニメーション映画祭に

3

オープンシアター2013 Vol.2

◎映画専攻

十二月十四日、横浜校地馬車道校舎三階大視聴覚室において、八期生長編制作実習作品『はつ恋』、九期生夏期制作実習作品『touch』『ギャングエイジ』『春と修羅』『まんまのまんま』の上映会を行った。ゲストに三宅隆太氏(脚本家、映画監督、スク립トドクター)を招いたトークショーも実施した。

4

オープンシアター2013 野上上映会

◎映画専攻

十月五日、横浜校地新港校舎において、『ビューティフル・ニュー・ベイエリア・プロジェクト』

ついで、様々な立場の複数の視点から議論するシンポジウムを、伊藤有孝教授による企画・進行により開催した。

パネリストには、スイスのフェスティバル・プログラマー、映像作家オットー・アルダー氏、アルゼンチンのアニメーション作家ワン・パブロ・ザラメーラ氏、イスラエルの漫画家ニシム・ヘズキヤ氏、韓国のフェスティバル・ディレクターキム・ソンジュ氏、山村浩二教授の五名を迎えて行われた。



7

公開講座『DEFA映画の歴史と名作』

映画専攻



5

コンテンポラリーアニメーション入門

アニメーション専攻



『スプリング・プレイカーズ』

4

オープンシアター 2013 野外上映会

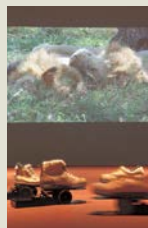
映画専攻



8

日中韓アニメーション学生国際共同制作プロジェクト

アニメーション専攻



(写真：木奥恵三)

6

ライオンシューズ

メディア映像専攻

ライオンシューズ
◎メディア映像専攻
21 DESIGN SIGHT 企画展 藤原大
デイレクション「カラーハンティング展 色
からはじめるデザイン」で展示された「ライオ
ンシューズ」。展覧会デイレクターの藤原大が
アフリカで採取したライオンの色をもとにカ
ンペールと藤原大が靴をデザイン、桐山孝司

6

◎アニメーション専攻
馬車道エッジズ コンテンポラリーア
ニメーション入門第十四回『How I make
animated film』は、スイスからドローイング・
アニメーションで現代を代表するジョルジュ・
シュヴィツゲベル監督を迎え、作品上映と自
身による具体的な制作プロセスを解き明かし
た。第十五回『現代日本のインディペンデ
ント事情』では、インディペンデント・アニメ
ーションの定義から、作品の傾向、発表の方法等、
昨今の状況をテーマに山村浩二教授と、しり
あがり寿、和田淳、湯浅政明の三名の監督に
よりシンポジウムが行われた。

5

コンテンポラリー アニメーション入門

◎アニメーション専攻

クト(映画専攻第7期修了制作)と『スプリン
グ・プレイカーズ』の上映会を行った。当初は
野外上映を予定していたが、当日、天候不良の
ため、急遽新港校舎内Aスタジオに会場を移し
て実施した。

7

公開講座 『DEFA映画の歴史と名作』

◎映画専攻

十月十九日、横浜校地馬車道校舎三階大視聴
覚室において、旧東ドイツの国営映画スタジオ
DEFA(ドイツ映画株式会社)に関する公開
講座を実施した。ベルリンの壁崩壊と同時に公
開された名作『カミング・アウト』(一九九〇年
ベルリン映画祭銀熊賞受賞)を上映し、東ドイ
ツ映画研究の第一人者であるラルフ・シエンク
博士(映画研究家・DEFA財団理事長)、山
根恵子(法政大学国際文化学部教授)、筒井武
文(大学院映像研究科教授)の三名による討論
を行った。

8

日中韓アニメーション学生 国際共同制作プロジェクト

◎アニメーション専攻

今年で四年目となるアニメーション専攻の学
生国際共同制作。東京藝術大学、韓国芸術総合
学校、中国伝媒大学の各大学より、大学院生を
中心にアニメーションを学ぶ学生を選出して六
チーム作り、十二月の韓国・ソウルにて十日間
の滞在期間の中で、今年のテーマである「縁
(Connection)」を元に、チーム毎に短編アニ
メーションの共同制作を行った。



上：「藝大生へ卒業修了作品インタビュー」
とびラー（アート・コミュニケーター）が藝大へ訪問。
アトリエで卒業・修了する学生にインタビューを行なった。
インタビュー記事は、東京藝術大学卒業修了作品展のHPに掲載されている。

下：「見学会（対話による鑑賞会）」
東京藝術大学卒業修了作品展の会場にて、
とびラーがファシリテーターとなり、来館者と一緒に対話による鑑賞を行なった。



右：「とびらステーション」
年に数回、100名を超えるとびラーが全員集合する総会。
8月はとびらプロジェクトの藝大代表教員である日比野克彦教授と共に、
今後の活動を考えた。

左：「障がいのある方のための特別鑑賞会」
障がいのある方のための、美術館の休室日を利用した特別鑑賞会。
とびラーは会場の運営や鑑賞をサポートしている。

TOPICS OF
FINE ARTS

2013.08 - 2014.01

美旬



右上：「とびらボードでGO!」

東京都美術館の特別展で子供たちに磁気ボードを貸出し、お絵描きをしてもらうプログラム。
とびラーのアイデアにより、磁気ボードに描かれた絵はポストカードのぬりえにしてプレゼントした。

左上：「あなたも真珠の耳飾りの少女プロジェクト」

とびラーのアイデアで生まれたプロジェクト。
美術館来館者の方が、フェルメールの作品になりきって写真撮影を楽しんだ。

下：「紙芝居プロジェクト」

開催中の展覧会を題材に、ストーリーも絵もすべてとびラーオリジナルの紙芝居を上演している。

1

とびらプロジェクト

（東京都美術館×
東京藝術大学アート・コミュニティ形成事業）

東京藝術大学と東京都美術館が連携し、アートを介したコミュニティの形成を目指すプロジェクトが平成二十四年よりスタートした。広く一般から募集した百名を超えるアート・コミュニティ（愛称…とびラー）が、人と作品・人と人・人と場所をつなぐ役割を担い、東京都美術館を拠点に活動中である。とびラーの活動はボランティアだが、学芸員や大学教員のサポートではない。新しい暮らしの形、アート・コミュニティをつくりあげるプレーヤーとして活躍する人々である。世代や職種を超えて集まったとびラーが生み出す様々な活動によって、多くの人々のアートを介した体験がより深く、充実したものとなることを目指している。

<http://tobira-project.info/>



「夏休みの美術館」

上野・谷中界隈の商店や工場を訪ね歩いて廃材を集め、それらを素材として創作するワークショップを実施した。



「スペシャル・マンデー・コース(学校向けプログラム)」

展覧会の休室日を学校団体のために特別に開き、ゆったりとした環境で対話による鑑賞プログラムを行っている。



「Museum Start あいうえので活躍する“とびラー”」

本事業は「とびらプロジェクト」と連動しており、とびラー（アート・コミュニケーター）が様々な場面で子供たちの伴走役を務める。



「ビビハドトカダブック」

ビビハドトカダブックは、上野の9つの文化施設をつなぐ“合言葉”。上野公園のミュージアムにもっと行きたくなる日比野克彦教授オリジナルデザインの冒険アイテムを参加者全員に配付している。



「のびのびゆったりワークショップ」

障がいのある子もない子も共に参加し、多様な価値観を認め合い、大人と子供が共に学び合うプログラム。



「放課後の美術館」

週1回、美術館を子供たちの放課後の居場所に。連携施設へのフィールドワークや廃材を用いたフリーワークなどを行う。現在、「上野公園を舞台にした〇〇をつくる」をテーマに制作が進む。



第8回藝大アートプラザ大賞 3

2

Museum Start あいっくの (上野地区文化教育施設連携事業)

東京藝術大学と東京都美術館が推進役となり、上野動物園や東京国立博物館、国際子ども図書館を含めた九つの文化施設が共催連携し、上野公園に集まる文化施設の魅力を編み直すプロジェクトが平成二十五年からはじまった。「Museum Start あいっくの」は、子供も大人も対等に学び合える環境の整備を目指すラーニング・デザイン・プロジェクト。「とびらプロジェクト」と連動し、さまざまなプログラムを実施している。

<http://museum-start.jp/>

3

第8回藝大アートプラザ大賞

十一月二十七日から十二月十三日まで、藝大アートプラザにて「第8回 藝大アートプラザ大賞展」(作品テーマ「音(おと)」)を開催した。これは、学生の制作活動の成果を広く社会に発信するため二〇〇六年度から実施している学内アートコンペで、厳正な審査を経た入選作品を展示、販売するもの。八回目を迎えた今回は、

総勢四十七名(六十五点)の作品が会場の藝大アートプラザを飾った。

初日に行われた授賞式では、学長賞(藝大アートプラザ大賞)、準大賞、藝大BIO賞を受賞した六名が列席し、宮田亮平学長と三田村有純藝大アートプラザ所長から賞状と目録が手渡された。今回、学長賞(大賞)を受賞したのは大学院美術研究科修士課程絵画専攻(油画)に在籍する小林あずさんの作品「妙な綾なる」。

小林さんは、「今回大賞を受賞できたことを大変嬉しく思います。今までにいくつかの公募展などで入選をする機会がありましたが、私にとって受賞は初めての体験となります。今回のアートプラザ大賞の募集テーマは『音』でした。作品では音楽を聴いている際の感覚世界を描いています。外界の存在である音が内界に流入する様、外部の存在である音が内部に水のように注ぎ込み、満ちていく姿を描いています。作品のタイトルの「妙な綾なる」には意味と音の面からダブルミーニングをしています。『妙な綾』は音楽の美しい調べの意味と、英語のeternalの音とをかけています。『綾なる』は美しく彩ること、yearner(英)「切望する人」をかけています。今回の大賞を励みに、今後も制作に励みたいと思います。また作品を介して皆様の目に触れる機会があれば幸いです。ありがとうございました」と話していた。

坂崎千春

絵本と図書館が大好きだった子供時代、そして
Suicaのペンギンが生まれるまで。



動物が登場するファンタジー好み

絵はあまり得意ではなくて、本を読むのが好きな子供時代でした。繰り返し読んだのは『スノーピー』で、和英併記が勉強にもなりそうだったというところで、父が会社帰りに買ってきてくれたものが家に何冊もありました。ほかには『ドリトル先生』や『エルマーの冒険』『クマのプーさん』のような、動物が出てくるファンタジーが好きでした。

小学三、四年生ぐらいになると、インコが冒険するお話を考えて、それを手づくり絵本みたいにすることがあります。そんなに凝った造本じゃなくて、ホチキスで止めただけでしたけど。とにかく本が大好きで、図書館によく通っていました。だから図書館の司書さんになりたいと思っていました。本の裏見返しについている貸出用の図書カードが楽しくて、自分の家の本にも付けて、妹に無理やり貸し出して遊んでいましたね(笑)。

中学では週一のクラブ活動で美術のクラスに入り、名画をシルクスクリーンで刷るようなことがありました。ちょうどマリー・ローランサンが流行っていた時代で、版に分けて刷るのが楽しかったことを覚えています。中学の授業では他にも、自分の好きな詩の一節や歌の歌詞など何か言葉を選んで、ポスターをつくったことがあります。イメージを形にするということをはじめて試みて、絵はそんなにうまく描けなくても技術的なことをきちんとやれば、きれいなものができることを知りました。美術がおもしろいと思ったきっかけですね。ほとぼしる情熱を抱いたアーティストにはなれなくても、本のデザインやレイアウトは訓練を重ねることで、習得できるようなものになるんじゃないか。いつかそういう仕事に関われるにはデザイン科がいいと、高校時代に通っていた美術予備校の先生にも言われて、藝大を受験したのです。

「紙」という素材に惹かれる

藝大では絵本とカレンダーをつくる授業があって、担当の平野甲賀先生から「これはいいんじゃない」と言われて、初めて認められたと思いました。自分でも「やれた」という感覚があったし、すごく自信になりましたね。カレンダーは、数字をデザインしたもので、一月の「1」の形がペンギンでした。卒業制作も「絵本的」なアプローチのものを二冊つくったんです。エッシャーのような繰り返しモチーフを使ったデザイン的なものと、ペンギンをモチーフにした言葉遊びを本の形にしたもの。それを「絵



右：『イラストのこと、キャラクターデザインのこと。』ビー・エヌ・エヌ新社
左：『かぞえてみよう』（こどもMOEのえほん）白泉社

本コーナー」に仕立てた展示もしました。もうひとつ、牛乳パックをほぐして、そこに安全ピンやコイン、それに定期券なんかを漣き込んだものに、コピーみたいな文章をつけ日記みたいにしたものもつくりました。それも先生から「切り口がおもしろいね」と褒められ、「もう少しこうしたほうがいい」とヒントをいただきました。

そんなふうに紙ものが好きだったので、ステーションナリーの会社に入れば自分の得意なことを生かせるかもしれないと思って会社選びをしました。そうして入社したG.C.は、グリーティングカードや便箋、封筒がメインでしたが、ゴフスタインという作家の大人向け絵本も出していたので、もしかしたら自分もそういうのに関われるかもしれないというのもありましたね。この会社では仕事が細分化されていなくて、イラストも描いてデザインもして、紙も選んで印刷の立ち会いにも行きました。つまり商品の全工程に関わるんです。まだバブルの時期だったので、特色六色使用とか、恐ろしいことをやっていました(笑) 小さな工房みたいな雰囲気でした。

タイミングよく与えられた転機

会社に行ったときに自分がデザインした便箋を見た新潮社の方から会社に連絡があり、この絵を描いた人を装丁に使いたい。そのお話から初めて装画を手がけた『飲食男女』（アン・リー著 南條竹則監訳 一九九五年）の仕事につながりました。本が大好きだったから、自分が描いた絵で関われるならうれしいなと思って、会社を辞めて仕事を受けるようになっていったのです。

会社を辞めて一カ月後に参加したグループ展で、創作絵本の展示をしたんです。自分がつくった絵本を並べて、自由に見てもらおう。そのときに『ペンギンゴコロ』という絵本をつくって、気に入った人が買えるように小さな冊子にしました。それを見た出版社の方が「これを絵本にしませんか」と言ってくれました。そうして退社したのが秋で、その翌年の春に絵本が一冊出たのです。フリーになって三年目に、ペンギンをJRのキャラクターにという話が広告代理店からあって、Suicaのキャラクターになったのです。自分からはあまり積極的には動いていないんですけど、いいタイミングで目をつけてもらえたと思います。

本当に好きなものしか、素敵にはつくれないと思うのですが、自分が得意だと思っていないことも、ほかの人から認められること、求められたりすることは頑張ってみてもいいんじゃないでしょうか。そういう意見や

感想に素直に向き合っていくと、道が開けていくときがあるかもしれないという気がします。短所と長所というのは表裏一体で、私の場合、背景を描くのが苦手で、それがコンプレックスでした。だから単品で、そのものだけにクローズアップしたものばかり描いてきました。だから自分が短所だと決めているところに、意外な強みが隠されていることもあるかもしれません。



さかざき・ちはる

絵本作家・イラストレーター。1967年千葉県生まれ。東京藝術大学美術学部デザイン科を卒業後、ステーションナリーメーカーのデザイナーとして勤務。1998年よりフリーランスイラストレーターとして活動。『Suicaのペンギン』（JR東日本）や『チーバくん』（千葉県）などのキャラクター、『ペンギンゴコロ』（文溪堂）などの絵本、書籍や雑誌の装画など幅広い活動を行う。



藝大の教員たちが、
日々の研究やレッスンに勤しむ
「研究室」のなかは
どうなっているのだろうか？
なかなか見る機会のない
部屋を潜入ルポする。

大学院映像研究科 映画専攻

Graduate School of film and New Media,
Department of Film Production

研究室探訪

第七回

Visiting the Laboratory

大学院映像研究科は、二〇〇五(平成十七)年に設置された学部を持たない独立研究科である。修士課程は「映画」「メディア映像」「アニメーション」の三つの専攻に分けられ、修士号既得者およびそれに相当する学識経験を対象とした博士後期課程「映像メディア学専攻」も設けられている。今回取材した映画専攻は、「監督」「脚本」「プロデュース」「撮影照明」「美術」「サウンドデザイン」「編集」の七つの領域(コース)からなる。これは商業映画における職能区分とほぼ同じで、映画専攻に入学することにより、プロの現場と同様の映画制作プロセスを学習できるようになっている。

映像研究科の特長のひとつに、神奈川県横浜市を拠点としていることがある。馬車道校舎、万国橋校舎、新港校舎という三ヶ所に展開し、映画専攻は馬車道校舎を中心に活動する。しかし今回の取材の際には、修了作品の撮影が行われている新港校舎を訪ねた。スタジオにはセットが生まれ、多くの学生がスタッフとして参加。監督領域の松井一生さん(修士三年)の修了制作『ユラメク(仮)』の撮影現場だ。映画専攻では、短編から長編まで年間数本の作品を制作し、その費用は規模に応じて実習費として用意される。さらに施設・機材・備品もプロが使用しているものと同等クラスのものである。

松井さんは映像研究科映画専攻に進んだ理由を「修了生が撮った作品を観て高レベルだったこともあり、教授陣も魅力的でした。予算や機材など、本格的な映画をつくる態勢が得られることも大きかった」と語る。授業においては「黒沢先生の

指導を批判的に捉えながら、自分の世界を
進歩させていくことができたと思います」と
振り返る。

この日、撮影現場を見守っていた美術領
域の磯見俊裕教授は、『ワンダフルライフ』
(是枝裕和監督)、『バトル・ロワイアルII
鎮魂歌』(深作欣二・深作健太監督)、『殞の
森』(河瀬直美監督)、『ぐるりのこと。』(橋口
亮輔監督)など映画美術担当として多くの
作品を手がけてきた。撮影中の『ユラメク
(仮)』で美術監督を務める美術領域の谷本
佳菜子さん(修士二年)も磯見ゼミ生で、こ
の作品が修了制作になる。谷本さんによる
と「アニメーションのサウンドデザインを
学びたい」と思って神戸芸術工科大学に進学
しました。そこに磯見先生が教えにきたこ
とがあり、美術を専門にやりたいと思うよ
うになった。映画美術にかんして理論はも
ちろんですけど、実践的な課題を何本もつ
くることで、自由かつ主体的に考えていく
ことを覚えることができました」とのこと。

磯見教授も「映像美術とは」監督が考え
ていることを一緒に具現化するのが大きな
仕事です。私がかかわった映画を観てもら
いながら、脚本からどういうふうなセット
を導き出していったかを知ってもらう。タ
イミングにもよりますが学校にセットを
持つてきて、実習として制作することもあ
ります」と言う。さらに映画専攻について
は「プロの仕事の仕方、現場での進め方を
具体的に学んでもらいたいです。撮影現場
が整理され効率的に作業を進めることがで
きるといったことも、プロの世界と学生の
世界の大きな違いです。プロの現場の緊張
感を体感し、少しでも早く身につけてもら
いたいものです」と語ってくれた。



撮影したばかりの映像を確認する松井一生さん(監督領域修士2年)と現場を見守る美術領域の磯見俊裕教授。

上野の 寄り道 散歩道

第9回

「近代文学散歩」

東京藝術大学がある上野は、歴史や伝統と新しい文化が交差するスポットとして、観光に訪れる人も多い。藝大のすぐ近くにも、由緒ある杜寺や老舗、意外なエピソードを秘めた穴場が目白押しだ。大学から少しだけ足を延ばして、小さな旅に出てみよう。



1 幸田露伴「五重塔」

明治二十五年（八九二） 技量は抜群だが世渡り下手な「のっそり十兵衛」が主人公。妹の延や幸という音楽家の兄でもあり、第二次大戦後まで長命を保った作家の代表作。

2 森鷗外「雁」

大正四年（一九一五） 医学を学ぶ大学生の岡田に慕情を抱く高利貸しの妾・お玉が、その想いを伝えることができないまま、岡田は洋行。女性のはかない心理描写を描いた作品。



上野から谷中にかけては近代文学の多くの名作の舞台になってきた。

JR鶯谷駅とJR日暮里駅の西側に広がる谷中霊園の中ほどに、幸田露伴（一八六七～一九四七）の「五重塔」のモデルとなった五重塔跡がある。腕利きの大工「のっそり十兵衛」が完成させた「感応寺」の五重塔が、落成式の前夜、大暴風に襲われたものの無傷でそびえていた。しかしモデルとなった天王寺の塔は昭和三十三年（一九五七）七月に心中による放火で焼失。いまはその跡地が残るのみである。

「山椒大夫」「高瀬舟」などで知られる文豪、森鷗外（一八六二～一九三三）は明治二十二年から二十四年まで池之端三丁目に住み、「雁」は不忍池から旧岩崎邸庭園のあたりが舞台になっている。「岡田の日々の散歩は大抵道筋が決まっていた。寂しい無縁坂を降りて、藍染川（あいぞめ）のお蘭黒のような水の流れ込む不忍の池の北側を回って、上野の山をぶらつく」。無縁坂は鷗外の住まいからほど近く、その住居跡はいまホテルになり記念碑が建つ。樋口一葉（一八七二～一九〇六）は下谷竜泉寺（現在の台東区竜泉）の長屋で荒物屋を営みながら作品を書いた。「文学界」に載せた「たけくらべ」が好評を博し注目されるも、二十五歳で夭逝してしまふ。夜の上野の杜を描いた「十三夜」



3

樋口葉「十三夜」

明治二十八年（八九五年） 煙草屋の倅で、車夫になった貧しい高坂録之助と資産家の原田勇に嫁いだ幼なじみの阿関が、夜の上野の杜で偶然に出会い、身の上を語り合う。

4

夏目漱石「野分」

明治四十年（一九〇七） 学生時代からの友人である高柳と中野、故郷で教職に就いていたが職を追われた道也先生。百円をめくって出会った三人の作家にまつわる物語。



5

石川啄木「握の砂」

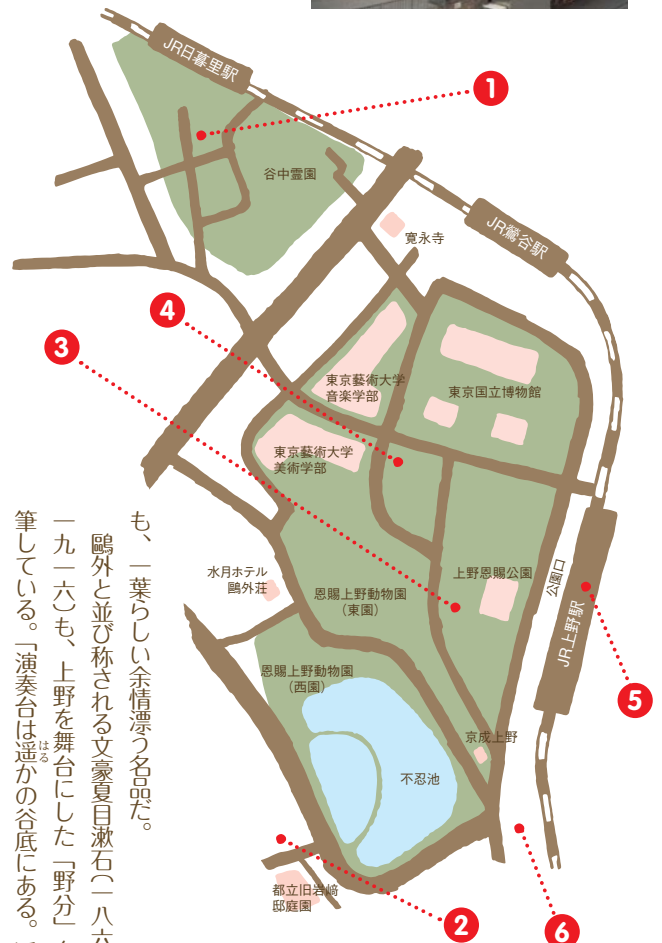
明治四十三年（一九一〇） 啄木が二十四歳のときに出版された第二歌集。三行分けによる散文的なスタイルの短歌は、若い世代を中心に多くの追従者を生んだ。



6

石川淳「焼跡のイエス」

昭和二十一年（一九四六） 石川は普賢で芥川賞を受賞して文壇での地位を確立。戦後は「焼跡のイエス」などの作品で太宰治、織田作之助らとともに「無頼派」と呼ばれて活躍した。



も、一葉らしい余情漂う名品だ。

鷗外と並び称される文豪夏目漱石（一八六七—一九一六）も、上野を舞台にした「野分」を執筆している。「演奏台は遙かの谷底にある。近づいたためには、登り詰めた頂から、規則正しく排列された人間の間を一直線に縫うがごとくに下りて、自然と通る挿鉢の底に近寄りねばならぬ。挿鉢の底は半円形を劃して空に向って広がる内側面には人間の裾が段々に横輪をえがいている」。この会場は東京音楽学校の奏楽堂である。石川啄木（一八八六年—一九一三）は岩手県民村（現在の盛岡市玉山区民村）から上京。第一歌集「握の砂」には、上野駅をうたった有名な短歌がおさめられている。「ふるさとの訛なつかし 停車場の人ごみの中に そを聴きにゆく」。東北の玄関口である上野駅を象徴する歌として□さまれてきた。

『さあ、きょうかぎりだよ。きょう一日だよ。あしたからはだめだよ。』と、おんなの金切声もまじって、やけにわめきたてているのは、殺気立つほどずさしいけしきであった」と、昭和二十一年（一九四六）七月の上野のガード下の情景を描くのは石川淳（一八九九—一九八七）の「焼跡のイエス」。現在の「アメ横（アメヤ横丁）」が闇市だった時代を活写している。

上野の杜の 波瀾 万丈

第十七回

サールナートの壁画

吉田千鶴子

インドの仏跡に大壁画を描くという偉業によって日印文化交流史に輝かしい足跡を印した野生司香雪という美校卒業生がいた。

日本画家の派遣の経緯

日本の冬の時期は、インドではほのぼのと温かい晴天が続き、実に心地よいのだが、それ以外は灼熱・湿気の耐え難い気候が長く続く。そのなかで四年間、一時帰国もせず、種々の困難や貧困と闘いながら黙々と壁画の制作に打ち込み、見事に完成させた野生司香雪（二八八五～一九七三）の精神力には感嘆するほかはない。戦後には長谷川路可によるチャイタヴェッキアの日本二十六聖殉教者教会壁画（一九五〇年）や藤田嗣治によるランスの礼拝堂壁画（一九六六年）などの例があるが、戦前にも香雪のように壮举を成し遂げた卒業生がいたのであった。

やがて、ダルマバーラ（Anagarika Dharmapala 一八六四～一九三三）という人は大菩提会（Mahabodhi Society）を創設した著名な仏教復興運動家で、幾度か来日し、日本の仏教界とも交流があった。彼は最晩年の

一九三一年、悟りを開いたブッダが初めて説法したサールナート（鹿野苑）にムラガンダー寺（初転法輪寺）を建立。その内部に英国大菩提会副会長B・L・プロートンの寄付金によって壁画を描くことになり、協議の結果、詩人タゴール（Rabindranath Tagore 一八六一～一九四一）の意見に基づいて日本の画家に依頼することになった。このことは大菩提会から酒匂インド総領事、日本外務省、日印協会、文部省、そして、正木直彦へと伝達された。当時正木は東京美術学校長にして帝国美術院長。美術の国際問題の多くは自ずと彼の判断に委ねられた。派遣画家の人选の結果、選ばれたのは桐谷洗鱗（二八七七～一九三二）である。洗鱗は東京美術学校日本画科（選科）を主席で卒業し、第一回文部省美術展覧会に入選するなど、円熟した画技が高い評価を得ていただけでなく、インド美術の研究に造詣が深く、岡倉天心や詩人タゴール、さらに正木とも親交があったので、第一に白羽の矢が当たったのである。

交流の礎

近代の日印美術交流というと、まずは岡倉天心のインド旅行（一九〇一～〇二、一二年）が挙げられる。天心はアジャンター石窟壁画その他インド古代美術視察のほかスワミ・ヴィヴェカナンダ、タゴール一族、ベンガルの画家たちとの交友、インド独立運動家との接触など大きな足跡を残した。それに引き続いて天心の指示による横山大観・菱田春草（一九〇三年）、勝田蕉琴（一九〇五～〇七年）らの渡印、桐谷洗鱗（一九一一～一三、一七～一八、二九年）、今村紫紅（一九一四年）らのインド旅行、詩人タゴールらの来日（一九一六、一七、二四、二九年）、堅山南風（一九一六年）のインド旅行、国華社・日本美術院によるアジャンター石窟壁画の模写（一九一七～一八年）、インド人S・N・ボースおよびデー・スワンカール・ラーヨの東京美術学校留学（一九〇五、〇六年）、画家ノン

野生司香雪の奮闘

正木の要請を快諾した洗鱗は鋭意準備を進めた。ところが、出発間際の一九三二（昭和七）年七月一九日に腹膜炎で急死。正木は「不常の感転深し」と日記に記して惜しんでいる。そこで代理として急遽選ばれたのが洗鱗の日本画科同期生（本科）でアジャンター石窟壁画模写に参加した野生司香雪だった。香雪はサールナートの壁画に「釈迦一代記」のどの場面を描くかを高楠順次郎・渡辺海旭および日印協会員たちと相談したと述べているが、七月二十四日には正木も訪問して何事か相談している。そのようにして周囲と相談した上で下絵を準備したようだが、インド出発が十月二十六日だったことを考えると準備期

ドラル・ボースの来日（一九二四年）等々の事例が思い浮かぶ。こうした交流活動の蓄積によって近代日本画というものがインドで評価され、壁画制作の依頼となったのである。



5



4



3



2



1

1. 桐谷洗鱗 卒業制作「蜘蛛」明治40年 東京藝術大学蔵
2. 野生司香雪 卒業制作「黄泉」明治41年 東京藝術大学蔵
3. カルカッタにおける歓迎会にて 香雪と詩聖タゴール
4. サールナートのムラガンダー寺院
5. ムラガンダー寺院壁画のうち降魔図

3.4.5は「野生司香雪 仏画の世界」(信濃毎日新聞社、1987年)より転載

間が短すぎるような気がする。恐らく洗鱗が描いた下絵に基づいて本下絵を描いたのだろう。洗鱗の弟子の河合志宏が助手として同行したのもそのことと関係がありそうだ。

だとしても、実際に壁画を描くのは容易ではない。十一月二十五日にカルカッタに到着した香雪は在印日本人たちや大菩提協会たちの歓迎を受け、病床のダルマバーラから「仏教によって育てられた日本美術を、仏教発生の地、この印度に再び迎へることを得たのは誠によろこばしい」云々と労われた。詩聖タゴールも歓迎会で日印文化交流に関する講演を行い激励した。

かくてサールナートに着いて現場を見れば、石造りの建物の内部を煉瓦積みにし、コンクリートで覆った上に絵を描くべき壁がしつらえてあった。いざ着手してみると絵の具の変色が著しく、耐久性は望めない。アジャントア壁画の下地のように特殊な粘土と牛糞と象の糞を混合し、穀殻のほか二、三種の植物を混ぜて塗るのが理想だが材料も職人も得られない。そこで研究に研究を重ね、近代科学を応用して下地を塗り直し、千年くらいは保つという自信をもって描き始めたが、予定の三十図の半ばにも達しないうちに資金が尽きたので、ボンベイで自作の展覧会を開いて金を得て制作を続け、一九三六(昭和十二年)四月九日に完成。

同年十一月三十日に大勢の出迎えを受けて帰国し、十二月十二日には上野精養軒で正木直彦、横山大観らも出席して盛大な歓迎会が開かれ、香雪の名は全国津々浦々に知れ渡ったのであった。

TOPIC
1

東日本大震災復興祈念・新潟県中越地震復興10年 法隆寺一祈りとかたち

推古15年(607)、聖徳太子によって創建され、現存する世界最古の木造建築物群としてユネスコの世界文化遺産に登録されるなど、日本を代表する古刹として、多くの人々から親しまれている法隆寺。このたび、東日本大震災からの復興を祈念するとともに、新潟県中越地震復興10年という節目の年に、法隆寺に受け継がれる寺宝の数々を公開する展覧会を開催いたします。除災や国家安寧を祈って造られた金堂(国宝)の毘沙門天、吉祥天(いずれも国宝)をはじめ、飛鳥、奈良時代以降の優れた彫刻や絵画、色鮮やかな染織品を含む工芸など、時代を超えて受け継がれてきた仏教美術の精髓が出陳される貴重な機会となります。また、フェノロサや岡倉天心による明治期の調査を発端として、法隆寺所蔵の文化財保護と継承に携わってきた東京美術学校(現・東京藝術大学)の活動や、法隆寺を主題に制作された近代の絵画、彫刻も紹介します。

右:「毘沙門天立像」(国宝) 平安時代、法隆寺蔵

左:「吉祥天立像」(国宝) 平安時代、法隆寺蔵 写真提供: 奈良国立博物館 (撮影: 森村欣司)



展覧会スケジュール (2014年1月31日現在の情報です。今後予告なく変更することがございます。)

本館

3月21日(金・祝)～4月13日(日)	藝大コレクション展—春の名品選—	入場料: 一般 300円 学生 100円 (中学生以下は無料)
3月21日(金・祝)～4月13日(日)	観音の里の祈りとくらし展—びわ湖・長浜のホトケたち—	入場料: 一般 500円 学生 300円 (中学生以下は無料)
4月26日(土)～6月22日(日)	東日本大震災復興祈念・新潟県中越地震復興10年 法隆寺一祈りとかたち	入場料: 一般 1,500円 学生 1,000円 (中学生以下は無料)
8月30日(土)～9月14日(日)	第2回 国際木版画会議特別企画展 「木版ぞめき」—日本でなにが起こったか—	入場料: 無料
9月12日(金)～10月26日(日)(予定)	台湾の油彩画・美校の卒業生たち(仮称)	入場料: 未定

陳列館

4月16日(水)～4月20日(日)	保存修復彫刻研究室研究報告発表展	入場料: 無料
4月26日(土)～6月22日(日)	別品の祈り—法隆寺金堂壁画—	入場料: 無料
6月27日(金)～7月10日(木)	日本画第二研究室 素描展	入場料: 無料
7月18日(金)～8月6日(水)(予定)	マテリアライジング展2—情報と物質とそのあいだ(仮称)	入場料: 無料
8月18日(月)～8月26日(火)	Ichiken ten 2014—東京藝術大学 日本画第一研究室 発表展—	入場料: 無料
9月11日(木)～9月25日(木)	第2回 国際木版画会議 国際公募展「国際木版画展2014」	入場料: 無料

正木記念館

8月18日(月)～8月26日(火)	Ichiken ten 2014—東京藝術大学 日本画第一研究室 発表展—	入場料: 無料
9月12日(金)～10月2日(木)	保存修復油画研究室と国立台湾師範大学との共同修復研究発表展(仮称)	入場料: 無料

※ 開館時間は、10:00～17:00(入館時間は16:30まで)。月曜休館。
ただし、月曜日が祝日の場合は開館し、翌日に休館することがあります。
なお、展覧会によっては、開館時間および休館日が異なる場合がございますので、その都度ご確認ください。

※ 展覧会の名称・会期については、変更することがございます。

※ 本学には駐車場はございませんので、お車のご来館はご遠慮ください。

※ 展覧会についてのお問い合わせ先
● ハローダイヤル TEL: 03-5777-8600
● 大学美術館 TEL: 050-5525-2200

※ 展覧会の紹介は、下記ウェブサイトでご覧になれます。
<http://www.geidai.ac.jp/museum/>

演奏会スケジュール (2014年1月31日現在の情報です。今後予告なく変更することがございます。)

奏楽堂

3月28日(金)	藝大21 奏楽堂企画学内公募「白頭稲荷祭禮絵巻」 しろがしらいなりさいれい えまき	19:00開演	無料	自由席
4月12日(土)	同声会新人演奏会 第1部(オルガン・ピアノ・弦楽器)	13:00開演	2,000円(第1部・第2部通し券)	自由席
	第2部(邦楽・管打楽器・声楽)	18:00開演		自由席
4月18日(金)	藝大フィルハーモニア新卒業生紹介演奏会	18:30開演	1,500円	自由席
4月25日(金)	藝大21 創造の杜 尹 伊桑(ユン イサン) 藝大フィルハーモニア	19:00開演	3,000円	自由席
② 5月18日(日)	藝大プロジェクト2014 シェイクスピア ～人とその時代Ⅰ シェイクスピアとエリザベス朝の時代	15:00開演	2,000円 (セレクト券:2枚・3,000円、3枚・4,500円あり)	自由席
5月25日(日)	ピアノシリーズ「音楽の至宝」Vol.2 ベートーベンのソナタ 第1回	15:00開演	3,000円(第1回・第2回通し券:5,000円あり)	自由席
5月29日(木)	学生オーケストラ定期演奏会	19:00開演	1,500円	自由席
6月1日(日)	ピアノシリーズ「音楽の至宝」Vol.2 ベートーベンのソナタ 第2回	15:00開演	3,000円(第1回・第2回通し券:5,000円あり)	自由席
② 6月7日(土)	藝大プロジェクト2014 シェイクスピア ～人とその時代Ⅱ 目で見えるシェイクスピア、音で読む『ハムレット』	15:00開演	2,000円 (セレクト券:2枚・3,000円、3枚・4,500円あり)	自由席
6月13日(金)	藝大フィルハーモニア定期演奏会	19:00開演	3,000円	自由席
6月14日(土)	学長と語ろうXV ゲスト:蜷川幸雄(演出家)	15:00開演	無料(往復はがきによる申込み制)	指定席
6月21日(土)	東京藝大チェンバーオーケストラ定期演奏会	15:00開演	1,500円	自由席
7月1日(火)	学生オーケストラプロムナードコンサート7	11:00開演	無料	自由席
7月3日(木)	東京藝大ウィンドオーケストラ学内演奏会	19:00開演	無料	自由席
7月5日(土)	藝大21 藝大とあそぼう オーケストラへの招待 ～目からうろこの実験教室	15:00開演	高校生以上:1,000円、小・中学生:500円 未就学児無料(3歳未満入場不可)	自由席
7月11日(金)	管打楽器シリーズ	19:00開演	2,000円	自由席
7月26日(土)	藝大21 時の響き JAZZ in 藝大	15:00開演	S席:5,000円、バルコニー席:4,000円	指定席

モーニング・コンサート	5月1日(木)、5月15日(木)、5月22日(木)、5月29日(木)、 6月19日(木)、6月26日(木)、7月3日(木)、7月10日(木)、 7月24日(木)、9月10日(水)	11:00開演	1,000円(※入場整理番号付き)	自由席
-------------	---	---------	-------------------	-----

※ 特にお断りのない限り、コンサートの会場はすべて本学構内の奏楽堂です。

※ 詳細につきましては、3月末発行予定の「平成26年度コンサートスケジュール(前期版)」をご覧ください。

※ 演奏会の曲目、開演時間などの詳細については、決定次第、大学ホームページで発表いたします。http://www.geidai.ac.jp/

※ 特に記載のあるものを除き、乳幼児等の就学前のお子様の同伴・入場はできませんのでご了承ください。

※ 本学には駐車場はございませんので、お車でのご来館はご遠慮ください。

※ スケジュール・曲目・出演者等は都合により変更となる場合がございますので、ご了承ください。

※ チケット取り扱い: モーニング・コンサートを除く

- 藝大アートプラザ TEL: 050-5525-2102
- ヴォートル・チケットセンター TEL: 03-5355-1280 <http://ticket.votre.co.jp/>
- チケットぴあ TEL: 0570-02-9999 <http://t.pia.jp/>
(一部携帯電話・PHS・IP電話はご利用いただくことができません。)
- 東京文化会館チケットサービス TEL: 03-5685-0650 <http://t.bunka.jp/ticket/>
- イープラス(e+) <http://eplus.jp/>

※ チケット取り扱い: モーニング・コンサート

- 前売券: 藝大アートプラザ(店頭販売のみ) TEL: 050-5525-2102
※ 他店での取り扱いはありません。購入後の払い戻し・変更は一切できません。
- 当日券: 奏楽堂入口券売所(10:10販売開始予定)
※ 前売券の販売実績により、取り扱いがない場合がありますので、ご承知願います。

※ 演奏会についてのお問い合わせ先

- 演奏芸術センター TEL: 050-5525-2300



ギルバート「シェイクスピアの芝居」

TOPIC 2

藝大プロジェクト2014 「シェイクスピア ～人とその時代」シリーズ

3年前「元禄時代」からスタートした藝大プロジェクト「その時、世界は?」シリーズが、2013年度の「消える昭和」でひとまず終了したのを受けて、2014年度から新シリーズ「人とその時代」に模様替えします。これは前回までのプロジェクトが、「時代」に注目したのに対して「人物」に焦点を当てるもので、初年度は今年、生誕450年を迎えたイギリスの詩人・劇作家、ウィリアム・シェイクスピア(1564～1616)を取り上げます。

シェイクスピアの戯曲は、共作も含めて40作と言われていますが、それらのほとんどがオペラや歌曲、器楽作品など、さまざまな形で音楽化されています。また美術の世界に目を転じて

も、ジョン・エヴァレット・ミレイの「オフィーリア」をはじめ、絵画になったシェイクスピア作品は枚挙に暇がありません。今シリーズでは、シェイクスピアが生きた「エリザベス朝時代」とはどんな時代だったかということから説き起こして、さまざまな視点からその業績を浮き彫りにします。

「シェイクスピア～人とその時代」ラインナップ

第1回「シェイクスピアとエリザベス朝の時代」2014年5月18日(日)

第2回「目で見えるシェイクスピア、音で読む『ハムレット』」2014年6月7日(土)

第3回「詩人シェイクスピア・マラソン・コンサート」2014年11月1日(土)

第4回「生まれ変わったシェイクスピア」2014年11月30日(日)

運営

◆平成二十五年年度藝祭
九月六日(金)から
八日(日)まで、上野校
地において藝祭を開催
した。

本年度のテーマは
「眩暈するくらい」。今
回は、校内だけでなく、
上野公園でもフリー
マーケットやステージ
での演奏が行われ、神
輿パレードを含め、上
野全体がお祭りムード
に包まれていた。



受章・受賞

◆佐藤雅彦教授が「紫綬褒章」を受章
大学院映像研究科メディア映像専攻の佐
藤雅彦教授が、平成二十五年秋の褒章にお
いて、紫綬褒章を受章した。

◆黒沢清教授が最優秀監督賞を受賞
大学院映像研究科映画専攻の黒沢清教授
が、十一月十六日、第八回ローマ国際映画
祭において、最優秀監督賞を受賞した。受
賞作品は「Seventh Code」。

◆藤幡正樹教授がインタラクティブ・アート
部門で優秀賞を受賞
大学院映像研究科メディア映像専攻の藤
幡正樹教授が、オーストリアで開催された
アルス・エレクトロニカにおいて、インタ
ラクティブ・アート部門で優秀賞を受賞し
た。受賞作品は「Voices of Aliveness」。

次回の「学長と語る
う こんさーと」は、六月に、蛭川幸雄さ
んをゲストにお迎えして開催予定。



◆第十四回「学長と語る う こんさーと」
ゲストに作家の夢枕獏氏を招き、十一月
二日(土)、第十四回「学長と語る う 奏楽
堂トーク&コンサート」が開催された。会
場の本学奏楽堂では、九百名を超えるお客
様が約二時間にわたり対談と演奏を楽し
んだ。

トークでは、夢枕獏さんの幼少時代から、
現在の趣味である釣りに至るまでの写真がス
クリーンに映し出さ
れ、それぞれの写真に
ついての話題で大いに
盛り上がった。

第二部のコンサ
ートでは、東京藝術大
学ウィンドオーケス
トラ(指揮…山本正治
音楽学部教授)の演奏
が行われ、途中では、
夢枕獏さんがステー
ジ上で朗読する場面
もあった。

◆新学生寮「藝心寮」オープン!

長年に渡り親しま
れてきた学生寮「石
神井寮」が老朽化のた
め今年三月に閉寮と
なり、四月に新学生
寮が足立区にオープ
ンすることとなった。



昨年、本学学生を対象
に名称募集が行われ、多数の応募作の中か
ら、芸術を志す学生の住む寮をイメージし
た小林あずささんの「藝心寮」が選ばれた。
「藝心寮」は、足立区東和三丁目に建設さ
れ、最寄り駅はJR常磐線亀有駅、もしくは
は東京メトロ千代田線北綾瀬駅となる。

物件は鉄筋コンクリート構造九階建て。
部屋数は三百室で、部屋タイプは通常の
ワンルームタイプのほか、防音室完備の
タイプも用意されている。また、アトリ
イや音楽練習室も用意されている。
「藝心寮」についての詳細は本学HPへ。

◆美術学部入試説明会を開催

美術学部では、昨
年九月二十八日(土)、
二十九日(日)の二日
間、初めて、入試説明
会を開催した。

今回、説明会に参加
したのは、油画、彫刻、
工芸、デザイン、建
築、先端芸術表現の各
学科・専攻。初めての
開催のため、まだ全学
科・専攻が揃うことが
できず、また内容もス
ライドを使用していた
説明や、アトリエ見学
など、分野によって異



なる内容となった。

◆藝大アーツ イン 東京丸の内

本学と三菱地所
株式会社は、十月
二十二日(火)から
二十七日(日)までの
六日間、東京丸の内
丸ビルで「藝大アー
ツイン 東京丸の内」
を開催した。



第七回目となる今年
は、イベントの目玉と
して、二十二日(火)
にはスペシャルゲスト
中田英寿氏をお迎えし
宮田亮平学長との学長
トーク「KOGOMEを世
界へ」(二十三日(水))
にはゲストに片岡鶴太郎氏と鎧塚俊彦氏を
お迎えしアーツイントーク「美をいしく
いただく鼎談」を行った。

連日、多彩なプログラムが行われ、十
月二十六日(土)と二十七日(日)には、藝
大オベラ「秘密の結婚」が計三回にわた
り開催された。

◆今年度下半期に開催された主な展覧会、演奏会記録

《大学美術館》

興福寺創建千三百年記念
国宝 興福寺仏頭展
会期 九月三日(火)～
十一月二十四日(日)

入場者数 十七万五千四百七十七名

《奏楽堂》

藝大オベラ定期 第五十九回 第一日
開催日 十月五日

入場者数 七五五五名

藝大オベラ定期 第五十九回 第二日
開催日 十月六日

入場者数 六四七名

藝大21 和楽の美 邦楽絵巻「并財天縁起」
開催日 十月九日

入場者数 六三三名

藝大フィルハーモニア定期演奏会十
うたシリーズ 生誕二百年
「ヴェルディとワーグナー」
(藝大定期第三五九回)

開催日 十月二十五日

入場者数 六九〇名

東京藝術大学・ジュネーヴ音楽大学 交流
演奏会 東京公演

開催日 十月二十七日

入場者数 六一六名

藝大フィルハーモニア・合唱定期
(藝大定期第三六〇回)

開催日 十一月十六日

入場者数 九一五名

藝大定期吹奏楽 第七十九回
開催日 十一月二十三日

入場者数 七八四名

邦楽定期演奏会 第八十回
開催日 十一月二十七日

入場者数 九三七名

藝大学生オーケストラ第四十九回定期演奏
会(藝大定期第三六一回)

開催日 十一月二十八日

入場者数 七六八名

◆藝大フレンズ
加入者数 平成二十六年一月三十一日現在

賛助フレンズ 個人 四三二名

法人団体 四社
特別賛助フレンズ 個人 十名

藝大基金寄附者(「芳名

東京藝術大学基金(藝大基金)へ温かいご支援を賜りました皆様に、心より感謝申し上げます。本号では、平成二十五年八月から平成二十六年一月末日までに寄附申込いただいた皆様を掲載させていただきます(掲載をご承諾いただいた方のみ)。

東京藝術大学は、皆様からのご支援により支えられています。末永くご支援・ご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

《個人の皆様》

宗次 徳二	様	一億円
呉竹 佳子	様	一千万円
北島 喜代子	様	五百万円
(音楽学部邦楽科卒業生)		
熊田 充博	様	三十万円
荻原 和子	様	十万円
柳井 喜美恵	様	一万円
田中 美子	様	一万円
宮沢 恵美子	様	一万円
内田 和子	様	一万円
長澤 敦子	様	一万円
中道 久次	様	一万円
松葉 悦子	様	一万円
追田 恵美子	様	一万円
奥村 豊野	様	一万円

《法人の皆様》

合田 隆治	様	一万円
坂井 登志子	様	五千万円
福田 淳	様	一千万円
磯貝 紀枝	様	一千万円
柴田 芳子	様	一千万円
鞍馬 邦明	様	一千万円
株式会社スタートトゥデイ様		五十万円
株式会社ノリタケカンパニーリミテッド様		三十万円
シンリュウ株式会社様		十万円
平成建設株式会社様		十万円
株式会社社兵左衛門様		五万円
中川特殊鋼株式会社様		五万円
池貝金属株式会社様		五万円

お問い合わせは総務課渉外事業企画室
050-5525-2025
藝大基金WEBサイト
<http://fund.geidai.ac.jp/>

連携・協定

◆美術系大学連絡協議会

十二月十六日、女子美術大学、多摩美術大学、東京造形大学、日本大学芸術学部、武蔵野美術大学、本学美術学部・大学院映像研究科の美術系六大学は、美術文化の発展とその教育普及を目的として、相互の連絡協議を促進するための美術系大学連絡協議会を発足し、本学にて覚書に署名した。今後は、美術文化の発展及び教育普及を目的とする学術研究や共同事業、初等中等教育における美術教育への支援、美術文化振興について、共同で協議を進めていく。



◆公益財団法人宝生会との連携協定

一月二十二日、公益財団法人宝生会と本学は、人材交流・人材育成などについての連携・協力に関する協定を締結した。この協定は、芸術表現の分野で緊密な協力関係を築き、連携を深めることにより、我が国における邦楽分野の発展、能楽の伝承および普及を図り、ひいては芸術文化の振興に資するものとなる。



◆東京藝術大学出版会の出版物等は、藝大アートプラザ、アマゾン(ネット販売)および一般書店にて取り扱っております。詳しくは、藝大アートプラザ(050-5525-2102)まで。

◆「藝大通信」編集部では、皆様からのご意見・ご感想などお待ちしております。今号の内容についてのご感想や、今後のご要望などありましたら、こちらまでお寄せください。

〒100-8714
東京都台東区上野公園十二-八
東京藝術大学総務課内 藝大通信編集部
ファックス 03-5685-7760
E-mail toiawase@ml.geidai.ac.jp

【お詫び】

昨年九月に発行した藝大通信第27号において、写真の入れ違いがありました。P24「P25「上野の寄り道散歩」の写真(2)護国院庫裡と③東京文化財研究所黒田記念館本館」が逆に掲載されていました。ここに訂正するとともに、深くお詫び申し上げます。(本学HP上に掲載しているPDFデータは、訂正済みです)

第28号刊行にあたって

東京藝術大学では文化芸術を専門とした指導者や学生が大勢いますが一言で文化・芸術と言ってもその分野は多岐に広がっており、どのようにして芸術世界と出会ったのか、それは実にさまざまです。

それぞれまったく異なった系譜からこの世界に入ってきた人たちが東京藝術大学という場で交差し協働するのもこの大学の特徴であり、その縮図がこの「藝大通信」に中に収められていると思いますし、この誌面が学際的活動のきっかけになると素晴らしいことだと思います。

藝大通信編集長
松下 計

展覧会・演奏会の最新情報は、東京藝術大学公式 Web サイト(<http://www.geidai.ac.jp/>)をご覧ください。

●展覧会についてのお問い合わせ先

東京藝術大学大学美術館
Tel. 050-5525-2200
NTT ハローダイヤル
Tel. 03-5777-8600

●演奏会についてのお問い合わせ先

東京藝術大学演奏芸術センター
Tel. 050-5525-2300

●演奏会チケットの取り扱い

藝大アートプラザ
Tel. 050-5525-2102
ヴォートル・チケットセンター
Tel. 03-5355-1280
チケットびあ
Tel. 0570-02-9999
(一部携帯電話・PHS・IP 電話はご利用いただくことができません。)
東京文化会館チケットサービス
Tel. 03-5685-0650
イープラス (e+)
<http://eplus.jp/>

●藝大アートプラザのご案内

Tel. 050-5525-2102